



Value aging Book



Value aging

自分らしく、ともに生きる年の重ね方。

人から人へ、想いをつなぐ。
未来へ、命をつなぐ。

寄り添うこと。信じること。

その人の「生きる力」を見つけること。

私たちの介護は、“お世話”ではありません。
心と体が少しずつ前を向く、“元気になる介護”。

一つひとつの想いが重なり、人同士を紡ぐ。
やさしさが循環していく——それが、Value aging。

昨日より今日を元気に。

今日より明日を元気に。

もっと自分らしく、生きていくために。

Value aging Concept

心と体の、そばにいる存在でありたい。

私たちサンケイビルウェルケアが大切にしているコンセプト、
Value aging——それは、「元気になる介護」の中に息づいています。
たとえば、自分の足で立つための、勇気ある一歩。
たとえば、「おいしい」と笑顔がこぼれる、ひと口のしあわせ。
たとえば、「ありがとう」と伝えたい、誰かとの温もり。

人は誰かとつながりながら、支えられながら、生きています。
だからこそ、私たちはその瞬間に寄り添い、
一人ひとりの“生きる力”を育み、重ねていくケアを大切にしています。
小さな気づきが心を動かし、
その人らしい毎日が明日を照らしていく——
それが、**Value aging**の基本ケアです。

健康とは、単に病気でないとか、弱っていないということ
ではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、
すべてが満たされた状態にあることをいいます。
(出典：世界保健機関(WHO)憲章)

身体的サポート

水分・食事(栄養)・排泄・運動に対するケア

01



01

身体的サポート

Value agingの基本は、「自立」と「自己決定」。自分の力で歩くこと。行きたい場所へ、自分の意志で向かうこと。好きなものを味わい、想いを伝えること。私たちは、その人が自分らしく行動できるよう、身体機能の維持・向上を通して、「自立」と「自己決定」の力を支えていきます。

02

精神的サポート

何かを始めるためには、「意欲」が欠かせません。その意欲を育むために、私たちはご入居者一人ひとりの人生観や価値観、パーソナルな想いを大切にしています。丁寧なアセスメントを行い、ご入居後もケアプランやサービスを継続的に見直ししながら、その方らしいライフスタイルをともに描いていきます。

03

社会的サポート

人は、誰かとつながることで、より元気になれる。閉じこもりがちな生活環境から意欲的に解放し、地域や他者との交流が新たな意欲や笑顔を生み出します。私たちは、ご入居者一人ひとりの“QOL(生活の質)”を高めるために、地域社会とのつながりを大切にし、積極的な交流や参加の機会を創り出していきます。

Value aging

02



精神的サポート

意欲・自己決定を大切にするケア

03



社会的サポート

社会参加を促すケア

Well-being

人生の主役は、いつまでも“あなた”です。

介護の現場は、日々、小さな奇跡に満ちています。
それは、ご入居者の変化だけでなく、
ご家族の安心、スタッフのまなざしのあたたかさ——
人と人が心を通わせる瞬間に、生まれるもの。

「歩けなかった人が、また歩けるようになった。」
「もう一度、好きだった場所へ出かけられた。」
「言葉を交わす喜びを思い出した。」

それは、できることが増えたというだけではなく、
“生きる喜び”を取り戻した瞬間。

私たちが大切にするWell-beingとは、
身体の回復だけでなく、心の充足、
そして社会とのつながりをとおして、
一人ひとりが“自分らしく生きる幸福”を育むこと。
人が人に寄り添い、信じ、支え合うことで、
心が動き、そして人生は再び動き出す。

Well-being——それは、「元気になる介護」が生み出す
生きる力と幸せを取り戻す、やさしい奇跡です。



私たちは、すべてのご入居者が「日々、どう生きたいか」を自ら決められるよう支援しています。自ら選び、生きる喜びを感じる。それが、サンケイビルウェルケアの考える「自己決定」です。



私たちが目指す自立支援は、ただ“できること”を増やすためのリハビリではありません。その方が、自分の意志で生きる力を取り戻すための歩みです。



私たちは一人ひとりの「元気になる力」を信じ、様々なエビデンス(科学的根拠)をもとにしたケアを実践しています。科学と想いが重なり合うところに、本当の“元気になる介護”が生まれます。

Value aging Story

想いをつなぐ、物語としての介護

私たちのホームは、「その人らしさ」をもう一度取り戻すところ。

ホームで重ねるその人らしいValue agingの物語。

ご入居者を支える様々な人々の想いで紡ぐ数々のストーリーを見てみましょう。

STORY #01



歌がっないだ回復の道
音楽の力で彩られた日常を、
ご家族とともに

STORY #02



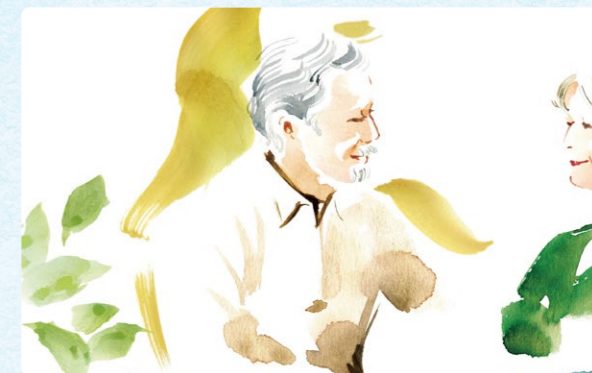
もう一度、競馬場の歓声の中へ
寝たきりから歩いてたどり着いた、
大好きな場所

STORY #03



「銭湯の番台に座りたい」
その目標が心を動かし、
穏やかな生活を取り戻す原動力に

STORY #04



ご入居者の意向とペースを最優先に
成功体験の積み重ねが
「元気になって帰る」を実現

STORY #01

K.M.様 83歳 女性



歌が
つないだ
回復の道
音楽の
力で
彩られた
日常を、
ご家族
とともに

NHKのど自慢予選に2度出場したこともあるMさんは、大の歌好きでした。しかしある日、自宅で転んで背骨を骨折。入院中には心臓に一時的な不調(たこつぼ型心筋症)が起き、食欲も低下してしまいました。点滴だけでは足りず、首から管を通して栄養を届ける「中心静脈カテーテル」を入れることになり、医師からは長期療養の病院への転院を勧められました。「病院で過ごすのは、母らしくない」そう願ったご家族が選んだのが、たとえ管があっても体を縛らずに支えることを大切に私たちのホームでした。

入居後は専門職による丁寧な評価が始まりました。飲み込みの専門家(言語聴覚士)は「食欲の低下が大きな要因」と分析。体の動きをみる理学療法士は「介助があれば歩ける」と前向きに評価。看護ス

タッフは医師と連携し、「少しずつ口から食べられるようになれば管を外せる」と目標を立てました。ご家族は毎日面会し、食事のたびに励まし続けました。Mさんがふと歌を口ずさむと、ご家族も一緒にハミング。その姿を見たスタッフは「歌こそ元気を取り戻すきっかけになる」と考え、音楽を取り入れる機会を増やしていきました。

やがて声が戻り、笑顔も増え、入居から3か月でCVカテーテルを外すことに成功。今では好物のうなぎを食べに出かけたり、音楽アクティビティで歌を披露したりと、「Mさんらしい日々」を取り戻しています。最近では往年のアイドルのコンサートにも出かけ、「座って最後まで楽しめるほど体力がついた」と、ご家族も安堵の笑顔を見せています。



ご家族

小さな可能性に寄り添う姿に、希望の光が見えました

入院中には医師から「もう新しく管を入れる体力も残っていない」と言われ、栄養のために入れた管(CVカテーテル)は一生外せないだろうと半ばあきらめていました。でも、ウェルケアテラス新座を見学したとき、どんなに小さな可能性でも信じて寄り添ってくださるスタッフの皆さんに出会い、「ここなら奇跡が起きるかもしれない」と希望を持つことができました。そして今、まさかこんなにも早く管を外せる日が来るとは思っておらず、本当に感動しています。

「元気のもと」に耳を傾け、心に響くケアを届けたい

私たちはまず、ご本人にとっての「元気の源」は何だろう、と考えることから始めました。歌がお好きなMさんに少しでも前向きな気持ちになっていただけるよう、日々の挨拶や声かけも明るい雰囲気を心がけました。そしてスタッフ同士が情報を共有し合い、「栄養のために入れている管(CVカテーテル)を外す」という目標に向けてチームで取り組みました。入居当初のMさんは食欲がなく、水分もなかなか口にされませんでした。そこで、ご家族から伺った好物を厨房と相談してご用意したり、とっくりとおちょこを使って「一杯いかがですか」とお声がけしたりと、小さな工夫を積み重ねました。すると次第に、食事や水分を口にされる量が増えていったのです。ご本人の気持ちに寄り添いながら、医学的・科学的な視点を持って本来の力を引き出していくこと——それが私たちの実践する「Value aging」です。ご入居者はもちろん、ご家族にとっても居心地の良い場所であるように、スタッフ全員で支え続けていきたいと考えています。



スタッフ

S.K.様 88歳 男性

もう一度、競馬場の歓声の中へ
寝たきりから歩いてたどり着いた、
大好きな場所



かつては銭湯やゴルフ、そして競馬をこよなく愛し、一人暮らしを楽しんでいたKさん。しかしある日、数日間連絡が取れないことを心配した妹さんが警察に安否確認を依頼し、自宅で倒れているところを発見されました。その時の状態は深刻で、褥瘡(床ずれ)は骨にまで達し、筋肉が溶け出したことで腎臓の動きも悪化。医師が「よく命が助かった」と驚くほどの重篤な状況でした。

在宅復帰は難しいとされ、いくつかの施設を検討した末に、リハビリと医療の両方をしっかり行える当ホームを選ばれました。入居時は要介護5、寝たきりに近く、血液検査の数値も非常に厳しいスタートでした。それでも医療機関との連携による治療が進むにつれ、少しずつ食事ができるように。やがて座る・立つといった動作が可能になり、歩

行器を使って移動できるまでに回復されました。ホーム内では生活動線に合わせて手すりやセンサーを設置するなど環境を整え、週2~3回のリハビリや日常での歩行訓練を重ねました。スタッフによる「元気になる介護」の積み重ねが、Kさんの心に希望の灯をともしました。「また競馬場に行きたい」かつての自分を取り戻すように、Kさんは新しい目標を語り始めました。リハビリの成果は実を結び、今では杖について近所のコンビニまでお菓子を買に行けるように。そしてついに、スタッフや仲間と一緒に念願の競馬場への外出を果たします。競馬場の入口に立ったKさんは、出走前の馬たちをじっと見つめ、満面の笑みで声援を送りました。その姿は、「自分らしく年を重ねる」という言葉をまさに体現していました。



ご家族

「ここなら大丈夫」と思える安心感が、回復を引き出す力に

入居した当初は本当に深刻な状態で、ここまで元気を取り戻せるとは思ってもいませんでした。スタッフの皆さんがいつも優しく声をかけてくださったおかげで、安心してリハビリに取り組むことができたのだと思います。これから施設を選ばれる方には、ぜひ管理者の方からじっくりお話を聞いてみてください。その施設がどんな想いで運営されているのかを知ることが、とても大切だと思います。私たちもその点を事前に確認できたからこそ、ここを選んで本当に良かったと感じています。

人生のどのステージでも、生きがいを取り戻すお手伝いを

Kさんが入居された当初、ご本人は「病院を転院した」と思っておられ、「いつ退院できますか」と私たちに尋ねられることもありました。けれども身体の回復が進むにつれて、ホームでの生活や支援の必要性を少しずつ受け入れてくださるようになりました。

歩けるようになった頃には表情も明るくなり、「競馬に行きたい」と新しい目標を語ってくださるようになります。やがて、他のご入居者の方と一緒に昼食前の集団訓練にも参加され、妹さんが驚かれるほどリズムに合わせてしっかり体を動かせるようになりました。Kさんの願いを叶えるため、スタッフは「競馬場に行こう」という外出アクティビティを企画。コロナ禍を経てようやく実現したその日は、ご本人はもちろん、同行したスタッフや他のご入居者の皆さんも満面の笑顔に包まれました。

私たちは、ご入居者一人ひとりに「元気になる介護」を届けることを使命と考えています。元気なときから人生の最期に至るまで、その方らしく過ごしていただけるように——地域の医療機関とも連携しながら、チームで最適なサポートを考え、実践しています。



スタッフ

K.K.様 97歳 女性



「銭湯の番台に座りたい」
その目標が心を動かし、
穏やかな生活を取り戻す原動力に

長年、自宅で銭湯を営んでいたKさんにとって、番台に座り、常連のお客さんと交わす挨拶は、何よりも大切な日常でした。しかし転倒による骨折をきっかけに体調が悪化し、入退院を繰り返すようになります。病院からは「看取りの方針」が示され、ご家族は「最期まで穏やかに過ごしてほしい」と願い、屋上で外の空気を感じられ、アクティビティも充実している当ホームを選ばれました。入居当初のKさんはリクライニング式の車いすを使い、生活のほとんどに介助が必要な状態。自宅に戻ることは難しいと考えられていました。それでもKさんは繰り返しこう話されました。

「もう一度、銭湯の番台に座りたい」

その願いを叶えるために、スタッフは職種の垣根を超えて力を合わせました。最初はベッドの上で関節を動かす練習から始め、少しずつリハビリ室での座る訓練へ。最初は10分でお尻が痛くなる状態でしたが、毎

日の積み重ねで徐々に姿勢が安定し、やがて立ち上がる練習、パワーリハビリや歩行用マシン(トレッドミル)を使った訓練にも挑戦しました。その結果、歩行器を使って80メートルを歩けるまでに回復したのです。

かつてはすべて介助が必要だった移動や排泄も、今では軽い支えがあればご自身でできるようになり、生活は大きく変化しました。ベッドで過ごす時間が減るにつれ、表情も柔らかくなり、スタッフやほかのご入居者と笑顔で会話されるようになりました。お花見や池上本門寺への参拝など外出アクティビティにも参加し、楽しみを広げています。

そして今、ご自宅の銭湯の準備が整えば、「番台に座る」という願いが現実になろうとしています。Kさんの「もう一度」という強い想いは、身体を起こし、心を支え、日常を取り戻す力となったのです。



ご家族

“穏やかな余生”という静かな願いが、確かな回復につながりました

正直なところ、入居した当初は「せめて余生を穏やかに過ごしてくれたら」と願うばかりでした。まさかここまでスタッフの皆さんが熱心に関わってくださり、これほどまでに回復するとは思っておらず、驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。当初は面会に行っても目を閉じて横になっていることが多かったのに、今では笑顔で会話ができるようになりました。ホームの屋上で一緒に外の空気を感じながら過ごす時間は、私たち家族にとっても大切で、本当に幸せを感じています。

職種を超えて知恵を出し合い、前向きな変化を生み出しています

当ホームでは毎日、ケアマネジャー・介護スタッフ・看護スタッフ・機能訓練指導員など、多職種が集まってカンファレンス(話し合い)を行い、ご入居者お一人おひとりにとって「その方らしい生活」とは何かを丁寧に考え、実際のケアにつなげています。

Kさんの場合も、「もう一度、銭湯の番台に座りたい」という目標に向けて、ご自宅に行くには車の乗り降りの練習が必要ではないか、番台に座るために必要な筋力はどこか、どんな動作に注意すべきか、といったことを職種の枠を超えて知恵を出し合い、一つひとつ課題を乗り越えるための支援を続けてきました。ご入居者が少しずつ笑顔を取り戻し、元気になっていく姿を見られることは、私たちスタッフにとっても大きな喜びです。Kさんだけでなく、胃ろうから経口での食事へ移行できた方や、半身麻痺の状態から歩行が可能となり在宅復帰を目指す方など、これまでも数々の前向きな変化を見てきました。これからも、ご入居者の持つ可能性を信じ、その力を引き出せるように——チーム一丸となって寄り添う支援を続けていきたいと考えています。



スタッフ

K.Y.様 80歳 男性

ご入居者の意向とペースを最優先に
 成功体験の積み重ねが
 「元気になって帰る」を実現



75歳まで酒屋を営み、登山や人との会話を楽しんでいたYさん。引退後も元気に暮らしていましたが、ある時期からふらつきを感じて入院し、誤嚥性肺炎(食べ物が誤って気管に入ること起きる肺炎)を発症しました。口から食事ができなくなり、鼻からの栄養チューブに頼る生活が始まりました。さらに、自分でチューブを抜いてしまう恐れがあるとの理由から、手にミトンを着けられ、体をベルトで抑えられるつらい日々を過ごしました。「早く退院して、元の生活に戻りたい」——その強い思いを胸に、ご家族とともに当ホームを見学。ここで元気を取り戻したご入居者の話を聞き、希望を感じて入居を決意されました。

当ホームでは身体拘束を行わず、ミトンの代わりに安心して手を動かせるグッズを用意。「車いすでも自由に移動できますよ」とお伝えすると、Yさんはぱっと笑顔になり、「できるだけ自分のことは自分でしたい」と前向

きな気持ちを見せてくださいました。

その後は多職種が連携し、ベッドから起き上がること、座ること、筋力をつけることを段階的に支援。やがて車いすでの移動から歩行へと進み、なんと館内を小走りするまでに回復しました。嚥下(飲み込み)のリハビリも少しずつ進め、むせながらも「食べたい」という気持ちを大切に。医師と相談のうえ栄養チューブを外す判断をし、食べられるものが増えていき、ついには「なんでも美味しく食べられる」状態にまでなりました。

入居から10か月後、ついにご自宅へ。そこに至るまでの道のりは、順調な時ばかりではなく、停滞する時期もありました。しかし、ご本人の気持ちとペースを最優先に、ご家族とスタッフが焦らず寄り添い続けました。小さな成功の積み重ねが「できるようになる」という実感につながり、スタッフへの信頼と意欲が回復の大きな原動力となったのです。



ご家族

夫婦で暮らす生活に戻れて、本当に夢のようです

想像以上に体の状態が良くなっていく様子を目の当たりにし、その回復の早さに、嬉しい驚きで気持ちが追いつかないほどでした。病院では体を拘束され、寝たきりで何もできなかったのに、ホームに入ってから面会のたびに目に見えて元気になっていく姿に、本当に驚かされました。私たちは本人のペースをとっても大切にしましたが、その思いをスタッフの皆さんにも尊重していただけたことに心から感謝しています。「自宅に帰る」という願いが叶い、まるで夢のようです。

言葉で伝えてくださった回復の喜びは、私たちにとっても励みに

Yさんは毎朝ロビーで新聞を読むのが習慣で、ご自分のペースをとっても大切にされる方でした。リハビリに対しても最初は慎重なご様子で、無理に進めてしまうと逆効果になるかもしれないと感じました。だからこそ、Yさんが口にする言葉の背景にある想いや気持ちを丁寧に聞き取り、ご本人のペースに寄り添いながら、少しずつ前向きな気持ちを引き出していくことを心がけてきました。そうした関わりの中で気づいた工夫や方法はスタッフ同士で共有し、チーム全体で支える形をとってきました。

少しずつ信頼関係が築かれるなかで、Yさんは「こんなに良くなったんだよ」「本当にうれしかったんだ」と、回復の喜びをご自身の言葉で伝えてくださるようになりました。元気になった自分の姿を、自分の言葉で誰かに伝えられること——それは人生の中でもとても幸せな瞬間なのだと思います。そして、その場面に立ち会えたことは、私たちスタッフにとっても大きなやりがいとなりました。



スタッフ

要介護度の改善実績

446名

6段階改善

2名

要介護5 → 要支援1

5段階改善

4名

要介護5 → 要支援2
要介護4 → 要支援1

4段階改善

16名

要介護5 → 要支援1
要介護4 → 要支援2
要介護3 → 要支援1
要介護2 → 自立

3段階改善

34名

要介護5 → 要支援2
要介護4 → 要支援1
要介護3 → 要支援2
要介護2 → 要支援1
要介護1 → 自立

2段階改善

117名

1段階改善

263名

※2025年1月末時点 当社調べ

ご入居者を支えるスタッフたち

介護スタッフ、看護スタッフ、介護補助スタッフ、管理者、ケアマネジャー、生活相談員、コンシェルジュ、機能訓練指導員（言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、柔道整復師）、事務、往診医、薬局、訪問リハビリ、訪問マッサージ師、理美容スタッフ、清掃スタッフ、調理師、管理栄養士



その想いは、
未来へとバトンのように

この場所には、目に見えないバトンが存在します。
ご入居者からご家族へ、ご家族からスタッフへ、
そしてまた誰かの未来へと、想いが受け継がれていく。
それは「介護」という名のもとに育まれる、人生の物語。
サンケイビルウェルケアが目指すのは、
その一人ひとりの物語を、丁寧に紡ぎつづけることです。
Value agingとは、
ただ「老い」を支えることではありません。
「その人らしい生き方」をともに創り出すこと。



さあ、今日もまた、ひとつの物語が始まります。



株式会社 サンケイビルウェルケア